fromスイス◉中 東生
Shinobu Naka

Opusクラシック賞

EchoからOpusと改名して第6回目のOpusクラシック賞2023。10月8日、ベルリンのコンツェルトハウスで授与式が行われ、スイスからは室内アンサンブル・グループのチャーツ・チェンバー・アーティスツと『フェアリー・テイルズ』というCDを録音し、ソニークラシカルから発表したレグラ・ミューレマンが「独唱」女性部門で受賞した。ガラ・コンサートではヨアナ・マルヴィッツ指揮コンツェルトハウス管弦楽団と共にドヴォルジャーク《ルサルカ》の〈月に寄せる歌〉をしっとり歌った。それとはうらはらにエンディングでは、「今年の歌手」男性部門で選ばれたカウンターテナーのヤクブ=ヨゼフ・オルリンスキとガーシュウィンのメドレーを歌って盛り上げた。

トーンハレに山田和樹登場

パーヴォ・ヤルヴィ指揮チューリヒ・トーンハレ管弦楽団は10月4日、日本ツアーの曲目であるショパン「ピアノ協奏曲第1番」でブルース・リウと初共演した。上昇気流で怖いもの知らずのリウと、どんなリスクでもどんと受け止めるヤルヴィの組み合わせが頼もしい。体中のバネを使った跳躍力のあるリウのスリリングなピアノを、オーケストラは包み込む。冒頭は管楽器が目立ちすぎたが、そのうちバランスが取れ、ホルンの美しさが際立つ。第2楽章ではファゴットとピアノを寄り添わせ、第3楽章では輝かしいアゴーギクで頂点に達して聴衆を興奮させた。アンコールのショパン《黒鍵のエチュード》(op10-5)は躍動感と超高速で聴かせ、割れるような拍手を浴びた。

再登場したP・ヤルヴィは、迎えられた拍手が鳴り止まないうちからベートーヴェン「交響曲第5番《運命》」のモティーフをたたみ込むように鋭く繰り返す。緊張感が持続した第1楽章は最高にエキサイティングで、弦の美しさと全曲の構築力で観客の心をつかんだ。翌日はランチ・コンサートでブラームス「交響曲第1番」を、夜はベートーヴェン「序曲《献堂式》」とニールセン「ヴァイオリン協奏曲」を加えて同曲をもう一度演奏し、アジア・ツアーに出た。

彼らの留守中は、10月17日に南西ドイツ・フィルハーモニー管弦楽団の客演を聴いた。ベートーヴェン「《プロメテウスの創造物》序曲」で熱い演奏を聴かせた首席指揮者のガブリエル・ヴェンツァーゴ。続くチャイコフスキー「ヴァイオリン協奏曲」では、スイスの16歳イルヴァ・アイグルを迎え、第1楽章のあと、鳴り止まない拍手に包まれた。第2楽章以降は落ち着きを取り戻し、超絶技巧と美しく歌う高音を聴かせた。

後半はつい2週間前にトーンハレ管が演奏したベートーヴェン「交響曲第5番《運命》」で、それが聴衆の耳に残っているとしたら不利だろう。第1楽章は、主張はわかるのだが、休符がどんどん前倒しになってすべってしまう。それを落ち着かせるように第2楽章は刻むような演奏で地に足がついたが、反対に音楽が流れない。第3楽章はミステリアスな楽想が新鮮で、そのまま第4楽章に向かって充実した終演となった。当楽団では3人の日本人が活躍しており、当夜もファゴットの岸川由起と児玉光生の姿が見えた。

10月23日にはミグロ文化財団が、山田和樹率いるバーミンガム市交響楽団を招いた。彼らの音のふくらみかたはトーンハレ管とは異なり、ふわっと軽くホールに広がる。プロコフィエフ「交響曲第1番《古典交響曲》」ではその軽さが映え、一貫して楽しげに演奏した。続くサン=サーンス「ピアノ協奏曲第2番」は、ガザ地区の戦況に関するコメント等を発されることを敬遠してファジル・サイがキャンセルされ、スイスの若手、ルイ・シュヴィッツゲーベルに代わった。共演者、聴衆共に残念ではあったが、十分に熱い演奏が聴けた。

後半はリムスキー=コルサコフ《シェエラザード》で、冒頭は幻想性に欠けたが、各楽器の首席が弾く度に精度を増し、生かされていく。4月に首席指揮者に就任したばかりの山田がこれから研ぎ澄ませていく過程を凝縮したような尻上がりの演奏だった。アンコールの《ダニー・ボーイ》(ロンドンデリーの歌)は全員の心が一つとなって、アイルランド民謡を奏でる団結力が光った。

チューリヒ歌劇場《ドン・ジョヴァンニ》再演

2015年にセバスティアン・バウムガルテンが演出したモーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》は、生贄を食べるシーンなどの悪評で観ずにいたが、今季は興味ぶかい若手歌手を聴きにいってみた。掘り出しものはドンナ・エルヴィーラのルザン・マンタシュヤン。強い押し出しとエキサイティングな歌唱で、今夜の主役だった。題名役のコンスタンティン・シュシャコフは柔らかい上品なバリトンで注目株だが、この演出では主役のオーラを発するのは難しいか。ドンナ・アンナのゴルダ・シュルツは期待を裏切らず、豊満な声でドラマティックよりの豪華なソプラノを聴かせた。ツェルリーナのツィイ・ダイはオペラスタジオ生のころから不思議な安定感のある歌手だ。レポレッロのアンドリュー・ムーアも健闘した。指揮のペトル・ポペルカには精密さが欠けた。

チューリヒ歌劇場《バルクフ》でOpusクラシック賞を受賞したミューレマン